

昭和五二年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)26117079
振替 東京0158431 労金 東京労金本店No50234

購読料 月額400円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

われわれが勝つために 2

◇向坂ゆき夫人に聞く◇

向坂先生の蔵書 3

転向者のぼやき 8

— エコノミスト「大内秀明論文」を論ず —

さあ、反撃だ！「分割・民営化」は阻止できる 10

— 「東京会議」二・二六集会の報告 —

資料1 「東京会議」結成集会「基調報告」 12

資料2 「東京会議」結成準備会アピール 14

ソ連共産党第二七回大会の開幕 15

資料3 全民労協の「進路と役割」(二) 17

読者からのおたより 9

「三・二五」集会の案内 9

旬刊 社会通信

NO. 294

一九八六年三月二日

一九八六年三月二日発行
(毎月一日・二日・三日三回発行)

■巻頭言■

われわれが勝つために

「やがて全労協は連合体に移行し、総評は解体してしまうのだから、それに逆らってみても所詮むだである。今からそうなることを前提にして対応しておかなくてはならない」と主張する人がある。一見もっともらしく聞こえるものの、克服すべき日和見主義であり、敗北主義であると言わねばならない。

向坂先生は、「後退する時も鉄砲をうちながらでなくてはいけないよ」とよく教えて下さった。鉄砲をうつの放棄して、敵に背を向けながら一目散に逃げてしまったり、白旗をかかげて敵陣に降参してしまつては、次の適確な時期に適切な場所、反撃のための戦線を構築することはできない。客観的条件の変化に機敏に対応して、一大反撃に転じたり、敵軍の弱点に切りこんでその陣形を乱したりして、勝利の展望を切り拓くことはできない。客観的条件の成熟を、主体的条件の強化と闘いの高揚に転化することはできない。反動化に歯止めをかけることもできないまま、あのいまわしい産業報国会や大政翼賛会に到るまで後退を続けるほかはない。「社会党がものわかりよくなつてはおしまひである」ゆえである。

実際には彼我の力関係は戦前とは大きくことなっており、そのことを自覚して、わが方の力を全国津々浦々で結集しつづつ起ちあがりさえすれば、独占資本とそれに連動する反動化、右傾化の流れを阻止することは必ずできることである。

山岸全電通委員長や薬科電機労連委員長は、全労協の連合体への移行・総評の解体推進とあわせて、社会党の安保、防衛、エネルギー、外交、行革等に関する基本政策を、民社党が許容できる内容に転換させ、民社党や社民連と合同させようとしている。この十年來の山岸氏らによる党右傾化の動きは、新宣言をめぐる驚くべき介入によつていよいよ露骨化し、すでに勤労国民の社会党への信頼と支持を大きく失わしめている。

この先さらにこれらの重要な点で民社党と基本的に同じ政策に転換し、「歴史的和解」を進めるようなことになれば、日本社会党は自民党にとつてかわつて政権を担える党に躍進できるどころか、民社党なみの支持率の党に凋落するのは目に見えている。そんな党に変質してしまつては、若干の労組幹部の支持こそ得られても、全電通や電機労連の組合員大衆の支持はすっかり失つてしまふであらう。鉄鋼労連幹部のおぼえめでなくなつたのに反比例して、鉄鋼組合員大衆の支持は大幅に失われてしまつたように。

われわれは右傾化と解党主義からかけがえのない日本社会党を守るために、安保・自衛隊に反対する具体的な闘いや、反発・核燃料サイクル・核廃棄物処分等に反対する闘いや、国鉄分割民営化・教育臨調・地方行革に反対する闘い等々を、地方から強化し横に結合して、それらの力を結集することにより、党の基本政策を守りぬき、真の党建設・党員拡大を進めなくてはならない。第四九回、五〇回党大会を契機とした良心的党員結集の開始は、勝利への道をさし示している。

国労つぶし・総評解体・全労協の連合体化と社会党の基本政策転換・民社党化への右翼的幹部の策動は、軍備拡大・武器輸出解禁、原発拡大・原発輸出推進による利潤拡大という独占資本のいやらしい欲望の表明にほかならない。だからこそわれわれは闘いを強化して必ず勝たねばならないし、勝つことができるのである。

◇向坂ゆき夫人に聞く◇

向坂先生の蔵書

向坂先生の蔵書はものすごい。個人の蔵書としては空前絶後ともいわれる。蔵書の中味については、『読書は喜び』（新潮社刊）にくわしい。

その蔵書がこのたび大原社会問題研究所に「向坂文庫」として保管、一般閲覧にも供せられることが決まった。本の移動は三月一三、一四日という。向坂先生の奥様・ゆき夫人に蔵書にまつわる話をうかがった。（編集部）

蔵書はすべて大原社研へ

滝野 今日已向坂先生の蔵書にまつわるお話しをうかがいにまいりました。先生の蔵書が大原社会問題研究所に寄贈されることが決まって、もう半年以上になりました。みんな先生の本はどうなるのだろうか、たいへん関心が深いのです。

夫人 向坂は本が散逸しないこと、そして利用したい人はだれでも見られるようなことを強く望んでおりました。その希望を通すためには、大原社会問題研究所が一番よいと判断したわけです。

買い集めたのが弁証法的飛躍

滝野 この地に置いて、「向坂文庫」ができればとの声もいまだにないわけじゃありません。**夫人** 向坂は「社会主義協会に寄付する」って口ぐせのように言っておりましたからね。

でもね、向坂がなくなつて、洋書は近江谷さん、和書は和氣さんを中心に多くのお力をえて、じっさいに整理してみますとね、とても私どもの手におえるものでないことがはっきりしてまいりましたのよ。

和氣 私からお話ししましょうか。

夫人 そうですわね。

和氣 本の専門家にみてもらったところ、「このままの状態では、あと四、五年で死んでしまいます」といわれた。

夫人 死んでしまう本がたくさんありますよね。向坂がドイツで集めた本は、みんな百年以上も、古いものは二百年にもなりますもの。

和氣 専門家にいわせると、本は呼吸する生き物だそうです。先生の蔵書をひとりですれば二五年はかかるということですよ。

夫人 専門家がひとりですといたしましてね。

滝野 そんなにかかりますか。

和氣 しかも整理して保存して利用できるようにするためには、いまの建物の約五倍の建

物が必要です。あるいはもつと必要かもしれません。

滝野 じゃ、たいへんなお金が必要になるわけだ。

和氣 本の整理、保管、そして建物を建てるためには最低十億があると専門家はおっしゃる。

夫人 それから、寄贈しないんだつたら贈与税……。ちよつと想像を絶する額になると私は思います。本の評価のために専門家に来ていただいたのですが、「やたらに低い値段をつけれない」っておっしゃるの。あまりにデタラメじゃ鑑定された方が、かえってお困りにならないでしょうかね。

それと本の整理でしょう。それから書庫を建てなきゃいけませんでしょう。しかも、この土地は、都市計画で書庫は建てられないのです。しかも、これまでお話しした条件がすべて満たされたといたしましても、毎月の維持費がこれまたたいへん。この話しただけでここにおいておくなんてことはできっこないんですよ。みなさんが残念がつてくださるお気持ちにはよくわかるんですけどね、それはできないことなんです。

つまり、向坂が手に負えないほどの本を買っちゃったつてこと……。買い集めたのが弁証法的飛躍をやっちゃつて、それでもう手に負えなくなつたわけよ。

もしも大原に寄贈ということがなければね、いやでも本が分散しちゃうんですよ。それが一番いけないことなんです。

そしてね、大原が幸いに自分の研究所と法政の学生だけじゃなしに、一般に公開するつていう、そのこと一番（向坂の）遺志が通ることなんです。

タイムリーだった

滝野 大原は新しい図書館を建てるのですか。

和氣 多摩に移転し、新しい図書館ができる。収容能力がある、その意味でタイムリーだった。そうでなければ寄贈もできなかった。

夫人 大原研究所の方が欲しくつても、容れるところがなければどうにもなりませんでした。ですから、こちらとしてもひじょうに運がよかつたわけですよ。私はみなさんに喜んでいただけると思っておりますのよ。

和氣 土屋喬雄先生の本が一ツ橋大学の図書館です。これも図書館ができたときで、タイムリーだったといわれています。

夫人 いまは本でのそういうことになってるのね。

和氣 よく先生は、「鈴木（茂三郎）さんの日本社会主義運動の文献、土屋さんの日本資本主義発達にかかわる文献、そして自分のマルクス・レーニン主義にかんする文献を集め、これで日本におけるマルクス・レーニン主義研究所がつくれる」とおっしゃっていました。が、日本が社会主義になってからのことのようにですね。

大原は世界有数の図書館に

滝野 大原は「向坂文庫」ができることで、世界有数のマルクス主義文献を備えた図書館になりますね。「ノイエ・ツァイト」が全部そろってるなんてのは、先生のところだけでしょう。

和氣 「日本ではここだけだ」と、先生はそういつてらした。

夫人 それから、世間稀有の珍書だって向坂がいつてた……

和氣 ズームルヒの「神の秩序」(初版)ですね。これもありますね。

滝野 その本はどういうものですか。

和氣 ズームルヒは最初の経済統計学者でしょう。人口変動の源泉として経済状態に着眼したものです。初版は一七四一年にでてる。先生は、「これは世界的にまれな書物だよ」とおっしゃってた。

夫人 それは世界中に数冊しかないだろうって。

和氣 先生の書庫にはマルクス、エンゲルス、レーニン以外にも珍本、希覯本がありますね。先生は資本論の注にでてる本は「ほぼ全部集めてる」とおっしゃってた。

滝野 先生の蔵書については、『読者は喜び』が参考になりますね。

和氣 先生がお書きになっている以外にもウンとある。近江谷(左馬之介)先生は、「ドイツ共産党創立大会の資料がある」といわれてた。

とにかく先生は資料はなんでも残していらいっしやる。なんでもある。これは驚くばかりです。たとえば近いところでは社会主義労働党準備会、いわゆる山川新党にかんする資料、三池闘争のチラシは全部あるでしょう。

夫人 みんな案外、本家本元がないのよね。

滝野 場所がありません。どううまく捨てるか、そうなってしまふ。

引っ越は、それはもうたいへん

ところで奥様、あの蔵書をお抱えになって引っ越し、何度されましたか。

夫人 一番最初は福岡です。向坂がドイツから送った本は、叔父が三井物産におりましたから、長崎に倉庫を借り、そこにみんなおいておいたんです。私たちの家が落ち着いたとき、それがソックリやってまいりました。広いうちでしたが足の踏み場もないくらい。たいへんですよ、整理しないとね。

滝野 先生はおやりには……

夫人 そうよ、自分は車で来るでしょ。ちょうど雨が降っていたのね、だから自分は傘さしてね、本がぬれないようにするだけ(笑)。当時、きょう日のように軽自動車なんてありませんしね、家に運び入れたのは大八車。外国で買った本全部そうやって運びましたよ。

それだってね、あのうちに越しましたのも本の置き場があるというばっかりで、不便なうちへ越したのよね。お城の池が我が庭みたいに景色がいいことと、本が置けるばかりでこしたのよ。とにかく、本おく所がないとうち越せないわけよ(笑)。

それから東京に越しましたねエ。中目黒に本のおける借家が見つかって本が来ましたけどね。それまではどこかに預けてたはずですよ。

そこから鶴沼に行ったんです。鶴沼に行った時は、私の病気のため仮でしたから、本箱二つくらいでしたでしょう。それでもそこを引つ越すときは、けっこうあったんですよ。そのとき、荷造り不完全ねエ、本を途中で落としちゃった。こっちはぜんぜん知らずにいたのね。あるとき知らない人から手紙が来てね、本を見ると向坂という蔵書印がある。これは向坂逸郎さんのじゃないでしょうか、中央公論社に問い合わせたんですって。それで中央公論社から来たわけ。一五、六冊落つことしてるのよね。

それから田園調布です。そこで中目黒と鶴沼の本が合流し、次に等々力に越したわけですよ。そして等々力からここです。

等々力からここに越してくる時手伝ってくださいった方は、のべすごい人数です。越すと決まってから家に来られたお客様は必ず三〇分くらいサーブिसでね、くくることをやってくださいました。その頃だからコンテナなんてありません。来たらそれが義務みたいにくくっていただいたんですよ。

それを運んだんですが、それはもうたいへん。塚本健さんが、「ぼく、もう当分本屋の前通るのいやだ。見るのもいやだ。ソッポ向いて通るんだ」ってネ、そういう笑い話をなさったくらい。「もういやですよ、引つ越しは」「もう手伝わん」っておっしゃってた方もいらつしやいましたよ。みんなまいっちゃったのよ、あのとき。本を運ぶだけに三日か四日かかりましたっけね。

ところが本だけ運び出しちゃえば、先生は引つ越しすんだつもり(笑)。もうぜんぜん(笑)。(等々力は)一八年も住んだところですから、ガラクタがいっぱいあるんですよ。その整理もしなきゃならないし、とにかく本をどかさなきゃ動きがとれないし、本がどいたあと整理でしょう。そういうものは、もうぜんぜん我関せずなものね(笑)。あのとき、本当の引つ越しは私と父でやりました。本さえ引つ越しや、引つ越しすんだで、もうぜんぜん(笑)。

整理のたびに新資料

和気 ここに引つ越されたのは昭和二十七年ですね。今度の整理で出てきた山川(均)さんなんかの手紙でハッキリしています。

私が先生の本を整理したのは三回あるんです。一回目は火災と地震から安全となった新しい書庫ができた一九六七年一月に古い書庫から移した。移すだけに一日四時間くらいで三ヶ月くらいかかった。二回目は古い書庫の二階にあった新聞、雑誌、チラシを下に移したとき。今度で三回目です。

それにしても、整理するたびにいろんなものができます。昨日も山川さんの手紙、堺さんのチラシ、ノート、原稿を新たに見つけた。堺研究には欠かせない資料だと思います。いま思い出しましたが、近江谷先生は「ブルジョア経済学の文献をたくさん集めていらつしやいますね」とおっしゃってた。

夫人 敵情をよく視察しておかなければたかいはできないから、そりゃそうでしょうよ。
和氣 先生の未発表の論文もできました。

夫人 捨てたものはないはずですから、なんでもかんでもあるはずですよ。

滝野 最初からですか。

夫人 最初っから。「こんなもの捨てていいでしょ」といっても、「いかん」と。

蔵書の数は約七万冊

滝野 全部で蔵書はどれくらいになりますか。

和氣 雑誌をふくめて七万冊という見当だと思えます。国会図書館に調べ物に行きますね。ところがありません。「向坂さんところにあると思う」と相手はいうわけです。「その向坂のところから来たんです」というと、「それじゃありません」というくらいですからね。とにかく先生の蔵書は質、量ともにすごいものです。

滝野 奥様にとって印象に残る本はございますか。

夫人 そりゃありませんよ。これだけ数があつて、私のわからないものばかりでしょう。だから、私は本買ったことございませんのよ。

移転は三月一四日

滝野 大原に本が引越すのはいつでしょうか。

夫人 三月一三、一四日の二日間、一四日には全部終わらせるようですよ。

和氣 運び出すとき、フィルムにとればいいのですがね。

滝野 どなたかにお願ひできると思えますよ。大原に本が行つたあと、閲覧の手順はどういうものですか。

夫人 昨日、大原の方のお話しではすぐがいいようにもおっしゃつてたわね。でも「五月になればよろしいですか」とお尋ねしましたところ、「ええ、大丈夫です。新緑がきれいなときだからみなさんいらしてください」とおっしゃつてました。

和氣 整理が全部終わるのには五、六年かかるでしょう、ともね。

滝野 大原社研で「向坂文庫」として納められるわけですね。

夫人 二村所長のお話しでは、ここから持ち出したもの一切合切を「向坂文庫」として一つ所にまとめるということです。

滝野 それを聞いて安心しました。みんなも同じだと思えます。本の引越しのときにはうかがいたいと思います。今日はありがとうございました。

転向者のぼやき

——エコノミスト「大内秀明論文」を論ず——

戦前、「バスに乗り遅れるな」という言葉がはやった。右に傾いてゆくご時世に尺度を合わせようとどたばた走り廻るインテリのありようをいいあらわしたものである。

「エコノミスト」誌二月二十五日号に掲載された社会党の「新宣言」にかんする大内秀明氏の論文に眼をとおして、私はこの言葉を思い出した。大内氏はバスの運転手とはいえないが、ぼん引ぐらゐの役割は果たしている。

論文は要するに、南九州の田舎町に出かけていって、集まった住民を前に、「新宣言」そのものは一枚の紙切れにすぎないから、「政権党」になるべく、「ネアカのビジョン」を巧案しようではないかと説法したことを綴ったものである。どんな綱領的文書も——政権党になるかなれないかの問題は別として——実践に移されなければ紙切れ一枚にすぎないことは、だれでも知っている。

大内氏のいいたいのはそういうことではないようである。氏は、一方では、社会主義の「青い鳥」など追いかけることをやめて、現実主義に徹しようという気持ち、他方では、それではとても自民党に勝てないから、社会主義の理想主義とやらを打ち出そうという心情にかられたという思いをのべておいである。あるべきか、はたまたあるべきにあらざるかのはざまをさまよった氏の「苦惱」を開陳されておられる。ご苦労さまなことであった。といっても、そんなことは、われわれの知ったことではない。

われわれにとつて興味あるのは、真面目な党员たちからあなたがむかし書き、またいったことは一体どうなったのですかという質問を、氏が受けたということである。つまり、なぜあなたは「転向」したのですかという質問である。これにたいする大内氏の答えは簡潔率直とはいえないが、要すれば、日本における社会主義の「総決算」として「転向」したという一言につきる。

つまり、マルクス・レーニン主義だけは「キッパリ捨て」て、その他のありとあらゆる「社会主義」を受け容れたというのである。いいかえれば、憲法社会主義、過程社会主義、そして多元的社会主義の方向を提起することによって、日本の社会主義の伝統に戻ったというのがその弁解の言葉である。思想的「転向」という「灰色のグーティーなイメージ」をうち消そうとする大内の手法は、「総決算」であり、古い「社会主義」への復帰である。つまり大内氏はニュー社会党を歴史的にも、理論的にも破産してしまつたオールドな社会主義で根拠づけようとしておられる。このあたりは「苦惱」のせいかわからないが、氏は千々に乱れている。というより目茶苦茶である。西欧から輸入されたさまざまな社会主義思想のなかで、その最後の言葉として、歴史がマルクス・レーニン主義を確認したなどということ、氏の頭にはない。西欧の常識では、社会主義なる用語は社会民主主義の運動のことであるという変てこな理屈をつけて、大内「総決算」主義を補強されようとしていのだが、氏は西欧で赤ゲット式非常識を学んでこられたに違いない。

あとは例によつて、「国有化だけがだちに社会主義とは考えない」というだれも考え

ていないことを考えてみたり、「ポスト・ベトナム」のいくつかの出来事の本質をまともにつきとめようとせず、一切合財を反ソ反共主義でくくってしまうような通俗さで際立っている。ひと度坂を転げ落ちるならとどまるところを知らなくなるというのは、たしかに真理である。

大内氏は、党の路線転換が「ここまでですむ」とは予想もしていなかったといわれ、他方では満場一致の採択というような「欺瞞に満ちた嘘の妥協」ではなく、「民主主義と多元主義のニュー社会党らしく、堂々と採決によって決定してくれなかったのか」と不満をのべておいである。氏が二月大会や統開大会での経過を知らずにこういうことをいわれるのであれば、それは無知によるものであり、もしご存知の上でこう主張をされるならば偽善と呼ばれるにふさわしい。

一二月党大会においても、統開大会においても採決を回避すべく努めたのは、執行部であって、左派ではなかった。なぜ執行部が採決を望まなかったのかといえば、おそらくは、共同戦線の形態の党のイメージを毀（こわ）したくなかったからであろう。その代りに、執行部は——大内氏のいわれるように「嘘」といってよいかどうかは疑問であるが——左派に妥協した。すなわち、この論文のなかでは一言もふれられていない「新宣言に関する」大会決議が、満場一致で採択されたのである。

この大会決議には「道」の精神がきわめてコンパクトの形ではあるが盛り込まれている。過程社会主義論は否定されている。保革連合——それが西ドイツ流の「大連合」であろうと「小連合」であろうと——の志向には歯止めがかかっている。路線論議を、党内民主主義の許す最大限においてつづけることは保証されている。ただし、共通の目標のためには、左右両派のいずれを問わず全党をあげて取り組む決意も表明されている。私もまた、大内氏とは正反対の立場からであるが「ここまでですむ」とは予想もしていなかった。すなわち、左派は、八カ年にわたる論議のあとで、実質的にはなにもを失わなかったのである。この意味で、「社会党は少しも変わっていないかった」という大内氏のはやきに似たご意見には私も賛同する。

ただ多弁の大内氏が一つだけ書き落した事柄がある。それは「新宣言」が、党史上もつとも有効期間の短い綱領的文書になるであろうということである。八〇年代の闘争条件にそぐわず、現に、党外の多数の支持者や圧倒的多数の党の活動家たちから背をむけられている文書の命運は、すでにきまったようなものだからである。

いま、闘いのとき

流れを変える三・二五日比谷野音一万人集会に参加しよう！

日 時 三月二五日 一七時三〇分開場
場 所 日比谷野音音楽堂

※ 尚当日は、国会請願デモを行ないます。

さあ、反撃だ！

「分割・民営化」は阻止できる

——「東京会議」二・二六集会の報告——

一九八六年二月二六日、午後六時。新たな「二・二六」の幕があけた。「国鉄の分割・民営化に反対する東京会議結成集会」である。以下、簡単に集会のもようを報告する。

三千人で超満員

国鉄「分割・民営化」は阻止できる。国鉄解体攻撃に勝てる。「二・二六」九段集会は、国鉄闘争の「勝利への展望」を切り拓いた。

会場の九段会館は三千人の熱気であふれかえった。定員は千四百名なのだから、そのものすごさがわかるというもの。会場に入れぬ仲間も多かった。

集会は参加者の心を一つにした。「いま、闘いるとき」と、朝から百ヶ所の駅頭でチラシ配布、国会要請行動をおこなった地方代表の仲間たち、そして東京の仲間たちの心を融け合わせた。さらに、集会前段の全国交流会には大阪、盛岡、新潟および関東各地の代表者も参加した。

かくして、「東京会議」結成の目的は達せられた。第一に東京における国鉄「分割・民営化」に反対する運動は総結集され、第二に共闘の環を全国にひろげる端初を拓いた。

「勝利への展望」を示す

「東京会議」の仲間たちは集会成功にむけ死力をつくした。「いまたたかわないで、いつたたかうのか」と。彼らを三つの分野のたたかいが励ました。第一に職場、第二に地域、第三に政治の力だ。

五千万署名、進路アンケート調査、職場で奮闘する国鉄労働者の底力。新宿地区における「支援共闘会議」のひろがり。そして、(1)国鉄監理委員会「答申」のデタラメさ、(2)国鉄職場が「暴力教室」に転じていること、(3)「合理化」がどれほど利用者の安全・サービスを損うのかを暴露した国会論議。

世論にも変化の兆しがみえる。九万三千首切り、債務処理、土地、足がまじめに論ぜられるようにもなった。

「国鉄の分割・民営化に反対する東京会議結成集会」の大成功は、国鉄「分割・民営化」反対のたたかいに拍車をかけよう。「勝利への展望」を集会は指し示したから。

ナツパ服がよく似合う

演壇正面にスローガン、「いま、闘いるとき」とあった。

開会はカッキリ六時。ナツパ服姿の国労合唱団が歌う「おれたちのシルクロード」で幕をあけた。国労組合員には汗と油のしみこんだナツパ服がよく似合う。私には「おれたちは国鉄で働き続ける。クビ切りに応じるものか」と歌っているように聞こえた。

ついで初公開のスライドの上映。「国民の足・国鉄をつぶすな—分割・民営論をあばく」

と題され、二三分。楽しく愉快で、国鉄「分割・民営化」の本質をグサリとえぐった力作だ。一セット一万二千円。「分割・民営化」阻止のため、職場・地域で活用しよう。

地域の仲間も呼応

基調報告(資料②参照)は東京会議事務局で弁護士牛久保秀樹氏。一に首切り、二に増税、三に足・ふるさとつぶし、四に安全。これが「分割・民営化」の問題点。国鉄資産は百一十兆円。片や債務は二十一兆。二百兆マイナス二十一兆が財界・政府要人にころげこむ。これが、国鉄「偽装倒産」のカラクリ。簡にして要をえた報告だ。

氏は最後に、「国鉄の分割・民営化の虚構の実態を広く国民に知らせ、国民の力を無数の地域共闘に、全国の、中央の、統一した『共闘』に結集しよう」と呼びかけた。

全国に共闘組織は約一千をこえる。全国のローカル線を守る運動を代表し、栃木・足尾町の川本正三町議会副議長、岩手ふるさと線を守る会の小野寺重男事務局があいさつ。基調報告にこう呼応した。

「都市の経済を支えているのは地方。赤字だと、地方を断ち切れば都市もほろびる」(川本氏)、「東京会議は本流、反撃の出発点。連帯を深め地方のふるさと線を守る運動をもちあげたい」(小野寺氏)と。

会場は大きな拍手に包まれた。超満員にふくれあがったのもこの頃だ。

安保のような組織を

このあとよびかけ人十氏が登壇。代表して清水義汎(明大教授)、小島成一(弁護士)、岩井章(国労顧問)の三氏があいさつ。基調報告の内容をさらに豊かにした。

「監理委答申は論理的、政治的、交通政策的に問題外。責任は政府にある。国鉄問題は民主主義防衛にもつうずる」(清水氏)、「三千万署名は国民が本当のことを知りたがっている証明。これは「分割・民営化」反対を国民的規模の運動にひろげる条件。反対の者すべてが同じテーブルにつき、中曽根を包囲しよう」(小島氏)。

また、岩井氏は「民営・分割のネライは二つ。財産の横どりと国労の闘争力の解体だ。中曽根はけつして強くない。安保反対国民会議のような全国的な反対組織をつくりたい。それにむけがんばろう」と、展望を明らかにした。

力強く連帯のあいさつ

連帯あいさつは酒井政治(国労本部副委員長)、森田昭(東京地評事務局長)、石井辰三(国民春闘再構築東京懇談会代表)、吉原公一郎(世田谷・目黒・渋谷地区共闘よびかけ人、作家)、亀田得治(大阪府民会議代表世話人、弁護士)氏ら。

大阪府民会議は昨年一月結成。黒田氏は活動の経験をつままえ、「もっとハッスルしなきゃいかん。こういう気持ちにされた。国鉄法案をつぶすために全国的に手をつなごう。

東京会議にその世話を願いたい」と具体的な問題提起。また、「国鉄をよくする愛知県民会議」代表の新村猛氏からはメッセージが寄せられた。

「いま、闘いするとき」

集会もいよいよ大詰め。いやがうえにも高まる雰囲気なかで、国鉄労働者に、「まけてたまるか怒りをこめて ガンバレ国鉄労働者」と書かれた深紅の横断幕、檄（げき）が手渡された。目頭が熱くなり始めたのがこの頃だ。

そのとき、金井末吉国労東京地本委員長が決意表明に登壇。涙ぐみながらの感謝と決意の表明は、「いま、闘いするとき」とのスローガンを、三千人の心に通わせた。

まともは呼びかけ人で弁護士宮里邦雄氏。「一・二六」を「分割・民営化」反対運動発展のターニング・ポイント」と集約。運動発展に全力をつくし合おうと訴えた。

集会はこの他、「一、この会は、国鉄の『分割・民営化』に反対し、国鉄労働者のたたかいを支援し、共闘することを目的とします。二、この会の運営は、よびかけ人会、世話人会、事務局で行います。会に賛同する団体及び個人からなる世話人会を必要により開催します。この会には、事務局をおきます。三、当面、財政は、事業資金・募金等で行います」との「申し合わせ」を採択。午後八時二〇分、「インターナショナル」の大合唱で幕を閉じた。

「三・二五」で流れを変えよう

「一・二六」は大成功裡に終えた。波紋は各方面にひろがる。そして必ず大きなウネリとなる。私たちの課題はスローガン「いま、闘いするとき」をみんなのものとする事だ。

三月二五日、「一・二六」よりはるかにでかい集会が企画されている。日比野野外音楽堂での一万人集会。一ヶ月ある。全国一千の共闘組織と手をつなごう、共闘組織のない地区には組織をつくらう。すでにある組織は幅と厚みを大きくしよう。

三月二五日、数万人を集めよう。「二・二六」は雰囲気を変えた。「三・二五」は流れを変える。この集会を反撃のウネリにしよう。

資料1 「東京会議」 結成集会の基調報告

国鉄の分割・民営化を許さないために（全文）

一、分割・民営化の問題点

中曽根内閣は、昭和六二年四月、百十年続いた国鉄を切り削み、いわばただ同然に、国鉄を財界に払いさげようとしています。全国のネットワークを維持した公共交通の破壊、私たちは国鉄の分割・民営化を許すわけにはいきません。

国鉄の分割・民営化の問題は、それだけではありません。分割・民営化は、第一に、国鉄労働者一〇万人の解雇を内容としています。家族を含めると、四〇万人という人々の生活が不安におとしめられるのです。その中には、四万一千人の指名解雇までが計画されています。

国鉄の分割・民営化は、第二に、国民に一六兆七千億円を負担させるとし、大増税まで

が検討されていることです。それは、国民一人一四万円、四人家族で五六万円という増税です。国鉄のない沖縄、三宅島の人達も負担させられ、ローカル線沿線の人々にとってみると、線路がはぎとられたあとに増税がやってくるということになるのです。

第三に、通学線・通勤線と、生活に欠かすことのできないローカル線・地方公共線が廃止されます。ローカル線の廃止は、街そのものの存続にさえかかわってきます。歴史ある町、ふるさとの町をつぶす。その狂暴な国家の姿は、国立病院の統廃合などとあわせて、国民全体にかかわる問題といわなければなりません。

国鉄の分割・民営化は、第四に、国鉄の安全性を切り捨てます。民営化の先取りとして、国電ホームの無人化が実施されます。今、車輪とモーターは悲鳴をあげはじめ、列車の重さでぶち切れるレールのつなぎめのボルトの発見がおくることが真剣に心配されています。私たちは、国鉄の分割・民営化が国民にとって何のプラスもありません。

二、虚構の「国鉄破産論」

国鉄の分割・民営化のただひとつの口実とされているのが、「国鉄破産論」です。国鉄再建監理委員会の答申は、国鉄を「民間会社でいうならば既に破産した状態」と規定します。本当でしょうか。しかし、ここには、国鉄解体の大きな「カラクリ」が潜んでいるのです。まず、企業を破産といい、再建するというならば、その企業の資産と債務が正確に分析評価されることが、第一に必要なことです。ところが、驚くべきことに、再建監理委員会、資産と債務の実態を、一切、国民に公表しようとはしません。なぜなのでしょう。国鉄の資産と債務を正しく評価すると「国鉄破産論」が「カラクリ」であることが判明するからです。

ところで、破産とは、資産より債務が超過していることをさします。では、国鉄の債務は二一兆円ですが、他方で、国鉄の資産はどのくらいあるのでしょうか。一〇〇兆円ともいわれる国鉄の土地にあわせて、新幹線設備、全国通信網、営団地下鉄の株などをみて、国鉄の総資産は二〇〇兆円とみても大きな狂いはないのでしょうか。仮りに国鉄の総資産を二〇〇兆円とすると、どうなるでしょうか。債務とさし引いて一八〇兆円という黒字資産が残ることとなります。このような企業を民間では、優良企業といえます。そもそも国鉄が赤字で破産で、どうしようもない企業でしたら、財界が民営化するはずがないのです。

また、国鉄の借金も、つくられた借金といわざるをえません。国鉄の借入金の中には、九・二%という高利がある他、七%以上の金利の借金が全体の九〇%となっています。借入金が多岐にわたる一方で重大な問題は、国鉄の過少資本金の実態です。

国鉄は、営業キロ数で私鉄全体の三・七七倍の規模を有しています。ところが、資本金はわずかに七分の一という実態です。少くとも一二兆円は自己資本金をもたなければならぬ国鉄で、資本金は、わずか四五六〇億円、三・八%しかみだされていません。中曽根内閣が民間なみの経営を国鉄に要求するならば、まず自分の義務である増資を行うべきなのです。その企業体の中心骨格である資本金を適正にしないで、国鉄労働者に笑顔を要求しても国鉄の再建はできません。

私たちは、「国鉄破産論」は虚構であり、赤字もつくられたものであることを確信しています。数字上の赤字を解消することが必要ならば、政府が日本国有鉄道法第五条にもと

づき、増資をするだけで済む問題です。このような「偽装倒産」と評価できる「カラクリ」で、国鉄労働者一〇万人の解雇を許すわけにはいきません。

三、地域共闘と中央共闘を

中曽根内閣は、三月一四日にも国鉄解體法案を国会に上程すると公言しています。今、国鉄の分割・民営化の虚構の実態を広く、国民の皆さんに知っていただくことが、必要です。そして、その国民の力を無数の地域共闘に、そしてその運動が、全国の、中央の、統一した「共闘」に結集していくことが求められています。

私たちは、本日結成される「国鉄の分割・民営化に反対する東京会議」に幅広く結集しながら、国鉄解體法粉碎のために全力をあげることが決意します。

(一九八六・二・二六)

資料2 「東京会議」結成準備会アピール

七月二六日、国鉄再建監理委員会の「答申」が出され、政府は、一〇月一日に閣議決定し、昭和六二年四月、国鉄の「分割・民営化」という名による国鉄の解體を強行しようとしています。

この国鉄解體の狙いは、膨大な土地を含む国鉄の資産を、いわばただ同然に財界に払い下げようとするものです。政府と財界は、これまでも国鉄を喰いものにし、赤字だけを国鉄に押しつけてきました。国鉄解體は、その責任を一切とらずに、「分割・民営化」としてこの際、国鉄をすべて財界の丸がcaeにしようとするものであり、徹底許すわけにはいきません。

また、国鉄の解體は、民主的戦闘的労働運動の伝統をもつ国鉄労働運動の解體をも意図したものであることは、国鉄職場での団体交渉権を否認し、ファッショ的労務支配体制をつくり、人権さえも無視した当局の攻撃で明らかなおりです。この国の戦争準備と国鉄労働運動への攻撃とが、いつも軌を一つにしてきた歴史を見ると、私たちは、この国鉄労働運動への攻撃を国鉄労働者だけの問題として見過ごすわけにはいかないのです。

他方、私達は、今の国鉄に対し、要求もっています。日航機墜落の事故をみると、まず何よりも安全な国鉄を要求します。大都市において、国鉄用地がとりあえず不用とされるならば、国鉄用地は、緑地帯などとして国民に開放すべきでしょう。生活路線としての地方公共線（ふるさと線）の存続を強く求めます。更に、国鉄を国民の足とするためには、国民的監視の制度をこそつくるべきです。それらの要求実現のために、私達は国鉄の分割・民営化を認めるわけにはまいりません。

既に、国鉄の分割・民営化に反対する運動として、全国で千をこえる組織がつけられています。今必要なことは、このような運動が更に広がること、そしてそれらがひとつになつて全国共同の運動をつくりあげることでしょう。私達は、そのためにもまず、東京で、国鉄の分割・民営化に反対する運動が一つにまとまり、共同した運動を行うことを訴えるものです。

(昭和六〇年一月八日)

ソ連共産党第二七回大会の開幕

フィリピン情勢の激変により、歴史的なソ連共産党大会の報道が極端に圧縮されてしまった。また、大会開催中にスウェーデンのパルメ首相が暗殺され、大会代議員は会議を中断、この北欧の社会民主主義者を悼んで一分間の黙とうをささげた。

まさに今大会は、ゴルバチョフ書記長の言うとおり、「内政、現代世界にとって険しい分岐点といえる時期」に開催された感がある。

書記長演説は五時間以上におよんだが、時折ミルクティーで喉を潤しながら、張りのあるバリトンで話すゴルバチョフ氏の発言テンポは、前任者たちの二倍ともいえるほどで、なかなか迫力のあるものだった。

書記長演説は政治報告と題され、もちろんその中では、今日までに社会主義ソ連が収めた成果が示されている。ソ連の人口は、世界人口の約六%にあたる二億七七〇〇万人だが、工業生産高はすでに世界の二〇%に達しており、これが国民の福祉と高度な社会保障制度を支えていることは、否定しがたい事実である。

しかし、達成したことにあぐらをかいていては前進はありえない、反無謬主義と批判、自己批判こそが党のあるべき姿である。このポリシエビズム、革命的精神の全面的強化こそが今大会の基調の一つである。ゴルバチョフ氏は率直に、七〇年代の始めにかけて、社会・経済発展の過程で一連の否定的な傾向があらわれたが、その克服には、然るべき措置が速やかにとられなかったと、党の指導を批判している。

党大会に先立つあらゆる会議のなかでも党活動の欠陥が出されたが、たとえばモスクワ市の党協議会での市党委員会第一書記（新任）エリツィン氏の批判は、以下のように、痛烈であった。「長い間支配的だった粉飾報告の雰囲気は、のんびりと惰性で動く気風を生み出した。多くのプロセスが客観的に評価されず、その深刻さがあいまいにされてきた。その一つが幹部対策である。無統制のおもむくところ、商業、住民サービス、公共外食機関で高い地位を占める者が横領や不正蓄財に走るといふ事態に立ち至った。このことによつて改めて立証された苦い真理は、長期にわたつて公衆の批判の圏外にあったまさにそれらの組織や省庁で、いま重大な否定的現象が、ソ連共産党規約やソ連の諸法律、社会的モラルの規範の侵犯が現れているということである。」

このように、内政にかんして言うなら、今大会は、欠陥の鋭い批判、前進の途上で生じる困難の原因とそれを克服する道についての原則的な討議、生産の効率化、科学技術革新の加速、人的・主体的要因の活発化で実際に大変革を達成しようという熱気に満ちている。この点でも、今大会は画期的である。

書記長報告にある「現代世界の主要な傾向と矛盾」の項では、二つの体制間の矛盾、資本主義世界自体の内部矛盾（資本と労働、帝国主義諸国間、他国籍企業と民族国家との間の矛盾、米国、西欧、日本という現代帝国主義の三極間の顕在・非顕在な矛盾）、帝国主義と開発途上国との矛盾、そして人類文明の破壊をもたらしかねない環境・生態学的矛盾などが指摘されている。

これらを前にして必要なことは、平和と進歩を具現すべき世界的社会主義体制の強化、

異なる体制間の平和共存の確立、共有する問題を解決するための広範な国際協力体制の確立であるとされ、今後とも、文明の生き残りのために、核戦争の脅威の除去に全力を尽くす決意が表明されている。

始まったばかりの大会について多言を勞す必要はなからう。それに、ある大会代議員に言わせると、ゴルバチョフ報告は、「エンピツを手に一〇回、一二回と読み込んで初めてその一字一句の含蓄の深さが理解できるであろう」とのことである。分析的な記事は他の機会に譲るが、大会では、党綱領新稿、改正党規約、第一二次五カ年計画期と二〇〇〇年までの期間の国の経済・社会発展の基本方向が討議・採択される。疑いなく、これらはいずれも、ソ連共産党を支配している大胆で意欲的かつ現実主義的姿勢を強く反映したものであるであろう。

◇ 読者からのおたより ◇

自ら、党の分裂を公言した大単産委員長発言に憤りを感じ、自分の任務の重大さを痛切に感じているこの頃です。約半年間とだえている『資本論』の学習会を再開し、また選挙闘争に万全の体制で臨むべく努力しています。

(室蘭・M)

昨年の役員選挙で書記長、副委員長ポストを担われ、現在、副委員長として頑張っています。さて、最近の貴誌のトーン・ダウンが気になります。私たちの職場闘争がうまく進まないためでしょうか。これからも、私たち活動家を力強く励ましてくれる貴誌のますの充実を心から願うとともに、編集部の皆様のご健康とご活躍を願ってやみません。

(神奈川・T)

編集部より 叱咤激励ありがとうございます。情勢の動きのあまりの速さに驚き、かつまた編集に十有余年たずさわっているとアカもつきます。叱咤激励は編集子の喜びです。どんなに寄せてください。

N T T という名の合理化により、コスト管理が徹底されてきています。私たちの団結も分断されがちになっていますが、これからは本当の意味での団結づくり、つまり信頼と本音が語り合える団結を作らなければと感じる今日この頃です。

(島根・I)

編集部より 敵にも弱点が目立っています。その弱点にくらいつき、団結をつくりあげましょう。

私も専従という多忙な任務にあるため、このような種類の読みもので全部読むというのはめずらしいのですが、「社会通信」だけはかかさず全部読んでいます。適確な情勢判断にはいつも感心しています。これからもよろしく!

(千葉・I)

資料 全民労協の「進路と役割」——その二

〈課題と使命〉

一、戦後労働運動の流れと労働戦線の統一

①日本における近代的労働運動は、約九〇年の歴史をもち、戦後だけでも四〇年が経過している。

戦後の荒廃した状況下で再建された日本の労働運動は、四〇年の歴史の中で、民主主義の確立と労働者の労働条件の改善、国民生活の向上に多大の成果をあげ、労働組合自体も着実な成長を上げてきた。しかし、その道は決して平坦なものではなく、むしろその歩みは苦難にみちた茨の道のくり返しであった。

②また、戦後の労働運動は、その再出発の段階から戦前より持ち越された相互不信と政治的対立を背景として、二つの勢力に分立したままスタートした。それ以降、一九五〇年代前半まで主としてイデオロギーからくる運動理念の対立をもとに、分裂と再編を繰り返してきたが、その背後にあったマルクス・レーニン主義を主唱する特定政党の直接、間接の介入、干渉は目にあまるものがあつた。

③一九六〇年代以降も、労働組合の結集をはかろうとした労働戦線の統一のうねりがあつたが、結局、運動理念にかかわる団体間の対立と相互不信を底流として、統一への道はことごとく失敗に終わってしまった。

われわれは、こうしたきびしい体験を踏まえ、相互理解と信頼を深めつつ、労働戦線の統一に不退転の決意でとりくみ、一九八二年二月一日に全民労協を結成した。

ここに、新しい時代の幕開けがはじまったのである。

④そして、取り巻く環境の変化に対応し、労働運動の一層の強化、発展をはかるため、全民労協を新たな連合組織に移行することを決定した。

連合組織は、活動領域を拡大し、民間労働運動の強化・拡大をはかるとともに、官公労働組合との相互理解と信頼を深め、労働界全体の統一をめざしていく。

まさに、労働運動の新しい舞台に希望にみちた光が放たれたのである。

二、労働運動をとりまく環境と課題

①戦後、わが国経済は急速な拡大、発展をとげ、世界のGNPの一角を占め、世界第二位の経済大国に成長した。そして、労働者の労働条件も、賃金引き上げを中心とした闘争（春闘、賃闘など）の推進によって、着実に向上してきた。その間、二度にわたる石油危機が世界を襲ったが、わが国経済は、労働組合の適切な対応と質量ともに優れた労働力の存在などがあつて、その困難を乗り越え、諸外国に比べ順調に推移してきた。

②しかしながら、雇用情勢の改善は遅々としており、また、働く者の実質生活水準も年々の賃金引き上げをはじめ政策・制度改善の努力にもかかわらず、日本経済や企業業績にくらべるとその改善が遅れている。また企業規模間の格差圧縮も遅々として進んでいない。

一方で、財・経済団体は、相変わらず「生産性基準原理」をタテに、賃上げ抑制のみに終始し、労働者に我慢を強要してきたが、これは、日本経済、産業の将来にたいする経営者としての責任を放棄したものとわがざるを得ない。賃金、労働条件向上の取り組みの強化はもろろんのこと、総合生活改善の観点から、政策・制度闘争の前進など、労働運動の「力と政策」の一層の充実、強化が求められている。

③また一方で、政府の政策対応の遅れなどによって、国際経済摩擦といった新たな課題に直面することになった。

国際経済におけるわが国の比重の増大にもなつて、国際経済・社会での日本の役割と責任は極めて大きくなつてきている。そのため、内外需均衡のとれた経済成長を達成しつつ、

国際経済の発展と均衡に寄与していくこと、開発途上国への援助・協力を強化することが強く求められている。あわせて、国際面におけるわが国労働運動への期待も高まっている。④、⑤ 略

三、連合組織の役割と責任

①われわれは、名実ともに民間部門の全国的中央組織としての機能、役割を網羅し、加盟組織間の相互理解と信頼を深めつつ、自由にして民主的な労働運動の強化・拡大に努める。そして、過去の失敗を二度とくり返さないとの決意で、労働組合の主体性を堅持し、外部からのあらゆる支配、介入を排除して、労働組合主義にもとづいた強固な組織を確立する。

②われわれは、内外の労働者との連携を強め、民主主義にもとづく日本の平和的發展と世界の恒久平和の実現を期す。そのため、左右の全体主義を排し、民主主義を護り、自由・平等・公正で平和な社会の実現をめざす。そして、われわれの統一への努力を右翼的再編と一方的にきめつけ、教条的な誹謗、妨害を計ろうとする団体、組織（例えば、統一戦線促進労働組合懇談会―統一労組懇など）に対しては、毅然として対応していく。

③ 略

④ 略

⑤日本経済に占める中小企業のウェイトと役割は極めて大きい。われわれは、中小企業労働者の雇用と生活の安定、向上をはかる立場から、賃金・労働諸条件の格差圧縮に努めるとともに、企業基盤の安定・強化のための政策の確立とその実現をめざしていく。

⑥ 略

⑦労働組合の団結を強化し、「仲間がいる」ことを大切しながら、組織の強化、拡大を進めていく。そのため、加盟組織相互の理解と信頼をより深めるなかで、協力関係を強化しつつ、産業別組織の再編・統一、加盟組織の拡大を推進していく。あわせて、官公労働組合自らの積極的な努力を求めつつ、労働界全体の統一をめざしていく。

⑧労働組合組織率の低下傾向に歯止めをかけ、組織率の向上に全力をあげるため、産業別、企業別組織の組織強化努力とあわせ、中央、地方における連合組織の総力を結集していく。同時に、未組織労働者の賃金・労働諸条件の改善のため、われわれの労働諸条件の成果を未組織労働者に波及させつつ、労働者全体の経済・社会・政治の各面における地位の向上をはかっていく。

⑨ 略

⑩今日の日本の政治は、自民党の長期・単独政権の底流に変化の芽生えは見られるものの、野党の分立状態が続いており、現状を打破する新しい政治勢力の形成までには至っていない。

このようななかで、連合組織の発足は、政治の流れを転換するための新たな起爆的役割を果たす可能性を持っている。

このような労働組合の役割の重要性を自覚し、さらに影響力を強めていく。また目的を達成するため、要求・政策・目的が一致する政党、団体とは、相互の自主性を尊重しながら、必要に応じ協力して活動を進める。なお、政党支持については、当面、加盟組織の判断に委（ゆだ）ねる。

⑪政治・経済の国際化の進展にとともに、国際労働運動の分野においてもわが国の経済力に見合った役割と責任を果たさなければならぬ。

そのため、国際自由労連に一括加盟し、世界の労働者と連帯を強めながら、世界の恒久平和の実現、国際公正労働基準の確立、国際経済社会の新秩序形成に向けての活動を積極的にすすめていく。

（おわり）